

## 杉村行勇君のご逝去を悼む

杉村行勇君は去る平成3年2月病に倒れ療養中でありましたが、薬石効なく、11月9日享年59歳を以て、心不全の為東京虎の門病院で逝去されました。最近まで元気な笑顔を見せていた同君が、定年を間近かに控えて帰らぬ人となられたことは、まことに痛恨の限りであります。

杉村行勇君は昭和29年3月東京都立大学理学部化学科を卒業し、その後1年間神奈川県川崎市立塚越中学校教諭として勤務されましたが、同30年4月同大学院に進学し、同35年9月博士過程を満了されました。これに先立ち、同年5月気象研究所地球化学研究部に技術補佐員として採用され、故三宅泰雄先生の指導の下に研究を開始しましたが、これが生涯同君が気象研究所で続けた研究活動の始まりとなりました。翌昭和36年4月より地球化学研究部第二研究室に配属され、更に同37年4月気象研究所地球化学研究部第二研究室研究官に正式に採用されました。その後昭和45年4月同研究部第二研究室主任研究官、同54年4月同研究部第二研究室長を経て、同62年4月地球化学部長に昇任されました。

杉村行勇君の業績は、湖底堆積物の地球化学に始まり、「現世堆積物の地球化学的研究」により東京都立大学より理学博士の学位を受けましたが、更に海洋堆積物の年代決定や海洋におけるウラン、ラジウム、トリウム同位体の分布に広がり、「放射性同位体による海底堆積物年代の研究」に対し日本海洋学会岡田賞を受賞し、さらに核実験降下物中の人工放射性核種による海洋および海洋生物の汚染の研究にまで及びました。また海水中の微量金属元素の存在状態に関し、海洋生物の必須元素と考えられる金属元素が海水中で有機物と結合して存在することを示し、海洋化学の分野に新しい風を吹き込みました。同君はまた海洋と大気との間における二酸化炭素



の交換に関する研究を世界に先駆けて開始し、全太平洋の大気と表面水の間における二酸化炭素の交換を明かにし、「大気・海洋間の炭酸ガスの交換の研究」によって気象庁長官表彰を受けました。昭和63年より始まった「気候変動に係わる対流圏・下部成層圏大気の化学的研究」での活躍は同君の面目躍如たるものがあり、プロジェクト・リーダーとして、世界的でも初めて北極から南極近くまでの飛行機観測を成功させました。

杉村行勇君は学会活動にも積極的に参加し、気象学会、海洋学会および地球化学会の運営に力を尽くし、中でも気象学会誌「天気」の編集委員長としてその充実に努力されました。同君の業績は以上の様に素晴らしいものでありますが、その最たるものは筑波の一角に素晴らしい研究者集団を作り上げたことです。この研究者たちは今後杉村行勇君の理想を引き継ぎ、発展させて更に素晴らしい成果を上げてくれることに疑いはありません。

杉村行勇君のご冥福を心からお祈り致します。

(名古屋大学 金森 悟)